

2016年3月8日

## 魚道試験を先行し、サクラマス保全の検証結果が明らかになるまで サンルダム建設の中断を求める質問と要望書

北海道開発局長 本田 幸一 殿  
北海道旭川開発建設部長 伊藤 丹 殿

下川自然を守る会会長 桑原 友一  
サンルダム建設を考える集い代表 渋谷 静男  
サンル川を守る会代表 橋本 泰子  
環境ネットワーク旭川地球村代表 山城 えり子  
北海道の森と川を語る会：サクラマスまもり隊！代表 小野 有五  
大雪と石狩の自然を守る会代表 寺島 一男  
旭川サケの会代表 寺島 一男  
旭川・森と川ネット21共同代表 守屋敬義・三浦恵美子  
(一社)北海道自然保護協会会長 在田 一則

日本海のサクラマス資源にとって、天塩川水系でのサクラマスの遡上・産卵、ヤマメの生育、スモルトの降下が十分に保全されることが重要なことは、これまでの資料、専門家の意見からも明らかです。それらにおいて、サンル川がヤマメの生息密度が高く、天塩川水系のサクラマスにとってサンル川の個体群が重要であることが指摘されてきました。実際、「天塩川における魚類等の生息環境保全に関する平成26年度年次報告書」でもそのことが明らかにされています。

現在、天塩川のサクラマス資源に大きな影響を与える可能性が高いサンルダム建設工事と魚道施設に係る調査が並行して実施されています。このことに関して、前川光司北大名誉教授（魚類生態学）は「サンルダム建設事業に係わる検討報告書（素案）」に対する学識経験を有する者の意見聴取結果 議事録（平成24年9月）において次のように述べました。「開発局資料には、サンルダムの建設に伴うサクラマス保全に対して魚道の効果が確かめられるまで、ダムはつくるけれども湛水しない方針であると書かれています。こんなこと普通は考えられないというか、魚道が機能しない場合、無駄なダムがつくられたことになり、これをどうするのでしょうか。どうしてもダムが必要だと考えるのであれば、ダムをつくる前にきちっとした魚道をつくって、その効果を確かめてはどうでしょうか。無駄をなくすためです。北海道開発局は最終報告書で、ダムのサクラマスへの影響を最小にすると述べていますが、重要なことは放流に頼ることなく現在のダム上流部の個体群を維持することです。これが「最少化」の意味です。これに沿ってやってください。」

私たちはこの趣旨に基づき、以下にサンルダム建設についての要望と魚道試験の具体的方法について質問します。

2016年3月25日までに、要請団体にご回答をお願いします。

回答の送り先は以下へお願いします。

(一社) 北海道自然保護協会会長 在田 一則

063-0003 札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル

Tel. 011-251-5465 Fax. 011-211-8465

## 1 サンルダム建設に伴うサクラマス保全問題について

- 1) 「ダムのサクラマスへの影響を最小にする」ことの意味は、ダム上流部の個体群を幼魚放流によらずに現状を維持する、ことと考えられます。「最小にする」ことの具体的な内容を示して下さい。
- 2) 平成21年5月21日に北るもい漁協からの「バイパス方式によるサクラマス親魚の遡上とサクラマス幼魚の効果の確認」についての質問に、開発局は「サンルダムの本格運用は、魚道によるサクラマス親魚の遡上とサクラマス幼魚(スモルト)の降下の機能確認を行った上で、行うものと考えており、この機能確認が取れるまでの間は、利害関係者の理解を得て暫定水位運用を行います」と答えています。現在もこのとおりであると確認してよろしいでしょうか。

## 2 平成26年度の魚道試験に関する、「天塩川における魚類等の生息環境保全に関する平成26年度年次報告書 天塩川魚類保全に関する専門家会議、平成27年5月28日(以下、専門家会議報告書とする)および「平成26年度施行天塩川上流魚類生息環境調査業務報告書 公益法人北海道栽培漁業振興公社、平成27年3月(以下、業務報告書とする)」の内容について質問します。

- 1) 階段式魚道の高低差約24m→30m、延長300m→403m、隔壁間落差0.30m→0.25m、隔壁間距離3.00m→2.50mに変更になった理由と変更年時を示して下さい。
- 2) 湛水地上流部での本流との接続箇所でのスモルトの降下試験について、業務報告書では「20尾のスモルトを採捕、飯田橋下流で放流、リボンタグや電波発信機で行動を追跡、放流した19尾のスモルトはスクリーン等を設置していないため全て吐口からサンル川に流下し、魚道への降下個体は確認されなかった(196p)」と実験結果を詳しく示しています。なぜスクリーンを設置しないで降下試験を行ったのかその理由を示して下さい。一方、専門家会議報告書ではスモルトを忌避させるためのスクリーン回転数、遮断部(すだれ)の長さ・径などについて実験確認を行っていますが、スモルトの降下試験は示されていません(38p)。スモルトの降下試験結果は専門家会議に報告されているのでしょうか。専門家会議報告書に示されていないのはなぜか、その理由を示して下さい。
- 3) ヤマメ等のサンル川から流木除去施設(分水施設)のスクリーンの手前までの遡上試験を行っていますが、この試験の目的を示して下さい。

また、ヤマメのダム湖への迷入防止についての対策を示して下さい。

- 4) 仮排水路でのサクラマス遡上実験について、両報告書でサクラマス15尾を排水路下部に放流・行動追跡した結果、10尾が試験排水路を通過してさらに上流に遡上、5尾は下流と名寄川へ降下したことを確認しています。

この遡上試験において、排水路下流で採捕した個体でなく、すでに上流部へ遡上した個体を使用していますが、このことが実験結果にバイアスを与えたと考えられますが、いかがでしょうか？

また、「否遡上個体（5個体）は捕獲や発信器装着のストレスの影響で遡上しなかったと考えられ、遡上判断の対象から除外しても良いのではないか」（専門家会議報告書47p）としています。5個体を遡上判断の対象から除外した根拠を示して下さい。

また「ストレスの影響」とした科学的根拠を示して下さい。

こうした小規模な仮排水路での遡上試験を実際規模の魚道の遡上試験にどうつなげるのか、今後のサクラマスの魚道試験計画について示して下さい。

### 3 魚道試験全体について

上記のように、スモルトの降下試験、ヤマメの遡上試験、サクラマスの排水路の遡上試験などは、それぞれ目視、赤外線ビデオカメラ、電波発信機、超音波発信器等の使用によって丹念に行動追跡が行われていると思います。

- 1) しかし、スモルト降下試験、ヤマメの遡上試験など小規模の部分的な試験であり、約260mだけのサクラマスの排水路遡上試験でも、遡上個体と否遡上個体に分かれる結果が示されています。実際規模の7kmにおよぶバイパス水路、30mの高低差のある階段式魚道で遡上が上手く機能するか、未解明のままです。

従って、実際規模の階段式魚道、バイパス水路、分水施設等を建設した上で、その効果を確認する必要があると考えますが、このことについての見解と今後の実験計画を示して下さい。

- 2) その際、魚道のサクラマス遡上効果を確認するためには、ダム堤体下流までの遡上数を把握することが重要です。その調査方法について示して下さい。

- 4 以上のことから、実際規模の魚道を作った上で数年にわたってその効果が確かめられるまでは、現在行われているサンルダム建設を中断することを求めます。